

渥美幸雄 教授 履歴・業績

渥美幸雄 教授 履歴・業績

【履 歴】

1952年（昭和27年）4月29日 神奈川県川崎市生まれ

【学歴】

1971年3月 浅野高等学校 卒業

1975年3月 慶應義塾大学（電気工学科）卒業

1977年3月 慶應義塾大学 大学院修士課程 修了

2002年3月 広島市立大学 大学院博士課程 修了，博士（情報工学）

【職歴】

1977年4月 日本電信電話公社〔現NTT〕（電気通信研究所）入社

1999年4月 NTTドコモ（マルチメディア研究所）へ転籍

2003年4月 専修大学 経営学部 助教授

2006年4月 専修大学 経営学部 教授

2011年4月 専修大学 情報科学研究所 所長（～2014年3月）

【所属学会】

・情報処理学会

論文誌・特集号編集委員，モバイルコンピューティングとユビキタス通信研究会（MBL）研究運営委員，マルチメディアと分散処理研究会（DPS）研究運営委員，全国大会・座長，DICOMO シンポジウム・座長，DPS ワークショップ・座長などを歴任

・電子情報通信学会

論文誌・特集号編集委員，アクティブネットワークと応用技術時限研究会・専門委員などを歴任，終身会員

・情報システム学会 会員

【業 績】

【著書】

・『コンピュータ概論—情報システム入門—』

第5版（2010年2月），第6版（2014年2月），第7版（2017年2月），第8版（2020年2月），第9版（2023年3月予定），共立出版，共著者：魚田勝臣，植竹朋文，大曾根匡，森本祥一，綿貫理明

・『グループワークによる情報リテラシー情報の収集・分析から，論理的思考，課題解決，情報の表現まで—』

第1版（2015年10月），第2版（2019年10月），共立出版，共著者：魚田勝臣，植竹朋文，大曾根匡，関根純，

永田奈央美, 森本祥一

・『コンピュータリテラシー情報処理入門一』

第1版(2007年3月), 第2版(2011年2月), 第3版(2015年3月), 第4版(2019年2月), 共立出版, 共著者: 大曾根匡, 植竹朋文, 関根純, 森本祥一

・『情報通信概論』

2004年6月, 丸善出版, 共著者: 諏訪敬祐, 山田豊通

・『IPv6時代のインターネットプロトコル詳解』

共著, 2003年9月, 毎日コミュニケーションズ

・『基本マーケティング用語辞典(新版)』

共著, 2004年11月, 白桃書房

【論文】

・「Improving Fairness and Stability in Best-effort Service : A New Congestion Control Algorithm for SACK-TCP」電子情報通信学会 論文誌, Vol.E81-B, No. 11, pp.2023-2033, Nov.1998. 共著者: 近藤栄一, 吉田彰顕

・「Urgency-based round robin : A new scheduling discipline for multi-service packet switching networks」電子情報通信学会 論文誌, Vol.E81-B, No. 11, pp.2013-2022, Nov.1998. 共著者: オヌル・アルトゥンタシュ, 吉田彰顕

・「端末におけるサービス品質保証方式の提案と評価」電子情報通信学会 論文誌 Vol.J82-B, No. 5, pp.711-721, May 1999. 共著者: 阿部睦, 嶋野淳子

・「An Efficient TCP/IP Control Scheme for Next-Generation MobileIP Communication Networks」電子情報通信学会 論文誌, Vol.E84-B, No. 4, pp.863-872, April 2001. 共著者: 尾上裕子, 佐藤文明, 水野忠則

・「次世代インターネットのためのアクティブネットのルート設定方法と ANTS の拡張方法」情報処理学会 論文誌, Vol. 42, No. 12, pp.2897-2908, Dec.2001. 共著者: 高橋修, 西正博, 吉田彰顕

・渥美幸雄「モバイル環境を考慮した次世代インターネット方式に関する研究」広島市立大学 博士論文, 2002年1月

・「A dynamic delayed ACK control scheme and its evaluation on Mobile IP networks」電子情報通信学会 論文誌, Vol.E85-B, No. 10, pp.2117-2125, October 2002. 共著者: 尾上裕子, 佐藤文明, 水野忠則

・「モバイル IP ネットワークのための無線シミュレータ連携方式」電子情報通信学会 論文誌, Vol.J85-B, No. 12, pp.2087-2096, Dec.2002. 共著者: 尾上裕子, 佐藤文明, 水野忠則

・「W-CDMA 網でのリンク層 ARQ と TCP の特性評価」情報処理学会 論文誌, Vol. 43, No. 12, pp.3859-3868, Dec.2002. 共著者: 稲村浩, 石川太郎, 高橋修

・「NACK-based 高信頼マルチキャストのための RTT 見積り方式」情報処理学会 論文誌, Vol. 44, No. 3, pp.587-598, March 2003. 共著者: 森谷優貴

・「マルチメディアストリーミング配信サーバにおけるネットワーク情報活用型レート制御方式」情報処理学会 論文誌, Vol. 44, No. 3, pp.625-636, March 2003. 共著者: 尾上裕子, 萩野浩明, 高橋修, 駒木寛隆, 串田高幸, 山内長承

・「第3世代移動通信網を介した高速インターネットアクセスのためのステルス型ゲートウェイの提案と実装評価」情報処理学会 論文誌, Vol. 44, No. 3, pp.637-646, March 2003. 共著者: 高橋修, 関口克巳, 鶴

卷宏治, 稲村浩, 水野忠則

- ・「Reliable Multicast Control Scheme for Achieving TCP-Friendly in Heterogeneous Environment」電子情報通信学会 論文誌, Vol.E86-B, No. 6, pp.1821-1828, June 2003. 共著者: 森谷優貴
- ・「シームレス通信環境におけるモビリティ拡張型マルチメディアセッション制御機構」電子情報通信学会 論文誌, Vol.J86-B, No. 8, pp.1379-1388, August 2003. 共著者: 尾上裕子, 萩野浩明, 宮崎雄一朗, 駒木寛隆, 村尾高秋, 山内長承
- ・「マルチメディアストリーミングにおける再生時刻を考慮したパケット再送制御」情報処理学会 論文誌, Vol. 45, No. 2, pp. 402-411, Feb. 2004. 共著者: 萩野浩明, 宮崎雄一朗, 尾上裕子, 谷口雅昭, 駒木寛隆, 山内長承
- ・「SACK 情報を用いた高性能な TCP 再送制御方式」情報科学研究, 専修大学情報科学研究所, No. 24, pp. 15-26, March 2004. 共著者: 近藤栄一
- ・「通信・放送融合型の動的情報配信アルゴリズムの提案」情報処理学会 論文誌, Vol. 45, pp. 2608-2618, No. 12, Dec. 2004. 共著者: 西正博, 岡村義己, 吉田彰顕, 高橋修
- ・「通信・放送融合型モバイル環境を指向した UHF 帯電波伝搬エリアの検討」情報処理学会 論文誌, Vol. 45, No. 12, pp. 2619-2629, Dec. 2004. 共著者: 西正博, 吉田彰顕, 高橋修
- ・「移動通信環境におけるストリーミングのための基本構造と機能」専修大学経営研究所報, 専修大学経営研究所, 第167号, 2006年7月
- ・「高齢者向けパーソナル通信サービスの現状」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報研究所, 第67号, pp. 21-36, 2007年3月
- ・「文系学生のための情報通信技術の授業デザイン」専修大学経営研究年報, 専修大学経営研究所, No. 31, pp. 23-43, 2007年3月
- ・「一般住宅内ブロードバンド通信技術の評価」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報研究所, 第71号, pp. 16-29, 2009年3月
- ・「無線ブロードバンド通信サービスの多様化と現状」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報研究所, 第73号, pp. 19-29, 2010年3月
- ・「エンタープライズ・アーキテクチャにおける成果物の検証技法」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報研究所, 第75号, pp. 23-32, 2011年2月. 共著者: 森本祥一
- ・「遠隔地間の文理合同プロジェクト学習の実践」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報研究所, 第75号, pp. 13-22, 2011年2月
- ・「情報基礎教育のための教科書・教授教材の開発と展開～コンピュータ概論: 情報システム入門を中心として～」専修経営学論集, 専修大学経営学会, 第94号, pp. 1-15, 2012年3月. 共著者: 魚田勝臣, 大曾根匡, 綿貫理明, 植竹朋文, 森本祥一
- ・「感情表現による書評情報の可視化手法の提案と実装」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報科学研究所, 第78号, pp. 11-28, 2012年6月. 共著者: 松浦有容
- ・「経営学部における ICT 教育の補助教材—「情報システム入門」と「情報通信ネットワーク論」から—」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報科学研究所, 第81号, pp. 34-37, 2013年11月
- ・「住宅における通信環境の現状と変遷」専修大学情報科学研究所所報, 専修大学情報科学研究所, 第87号, pp. 25-34, 2016年7月

[その他]

国際会議：17件（省略）

学会の研究会および全国大会（省略）

特許：57件（省略）

特許取得済み：21件，出願のみ：36件

[表彰]

- ・第1回浦昭二記念賞「実践賞」受賞

「コンピュータ概論—情報システム入門—（第6版）の出版と継続的な情報リテラシ教育の実践」，2016年11月12日，共同受賞

- ・第10回情報システム教育コンテスト（ISECON2017）優秀賞受賞

「卒業生・企業人・教員のチームティーチングによる実践的 ICT 人材育成教育」，情報処理学会 情報処理教育委員会，2017年，共同受賞

【回 想】

[文系学生への ICT 教育を振り返って]

専修大学経営学部で20年にわたって携わってきた ICT（情報通信技術）関係の教育への思いと実践について簡単に振り返ってみたい。

- ・経営学部への着任に向けて

最初に、どのような経緯で専修大学経営学部に着任したかを述べる。

大学時代にコンピュータを勉強して大学院修士課程を卒業後、NTT（当時は電電公社）の横須賀電気通信研究所に就職して26年を過ごした（最後の4年間はドコモの研究所）。NTTの研究開発職の多くは、当時は概ね50歳を過ぎるといわゆる子会社など外へ出る。最近のことは定かではありませんが。

45歳を過ぎる頃より、職業人生の後半をどのように活動するか考え始めた。できればそれまでの経験を活かして人材育成に関わりたい、特に自分の専門である情報通信ネットワークについて、もし可能ならば大学でという淡い思いはあった。

大学にはいわゆる文系と理系があり（その区分けが適切かどうかとされていますが）、選ぶならばどちらとするかである。理系の研究者ですと最初から理系大学でなければという人もいるわけですが、私は理系大学へのこだわりはなかった。経営、経済、商学の学部の学生は、卒業後にビジネスパーソンとして、いろいろな判断下において ICT に関する素養が必要であるので、これらの学部での教育は面白いと思っていた。たまたま専修大学経営学部で情報通信ネットワークを専門とする教員を募集していることを知り、調べてみたら学部の柱の一つとして情報教育を挙げていたので、これはいいと思い応募することにしたのである。そして運よくというかご縁があってというか着任することができた。

- ・経営学部学生への ICT 教育

ICT は社会、経済などあらゆる人間活動を支える上で必要不可欠のものであるが、専修大学経営学部は開設

当初（1962年 [昭和37年]）より、文系学部ではあるが情報教育を重視して積極的に取り組んできたことは特筆に値する。コンピュータや通信の当時の技術やサービス状況を考えると関係者の先見の明に驚かされる。現代の学生にとって身近な情報通信技術（ICT）と言えばスマートフォンやパソコンであるが、そこに関係する様々な技術の仕組み、考え方、取捨選択を経営学との関わりの中で学ぶことは、卒業後にビジネス界で活躍する時の総合的なモノの見方の素養となる。学生にはICTに関するニュースや新聞記事を理解できるようにしておかないと、ビジネスパーソンとして活躍できないよ、あるいは困るよ、としばしば語りかけてきた。国内銀行のシステムトラブルが社会に多大な影響を与えたことは記憶に新しい。ICTがわかる経営幹部や行員が日本では、米国と比べて遥かに少ないことに起因すると指摘されている。学生には業種を問わず、将来、経営幹部に出世したらしっかり頼むよと。。

担当するICT授業科目の中に、「情報システム入門」（1年次の必修）、「情報通信ネットワーク論A, B」（3, 4年次の専門選択）がある。実施に際して、まず経営学部にふさわしいことを心掛けた。技術のマネジメント、ビジネスの創出といった経営の観点から、ICTの開発やICTがビジネスに及ぼす影響について取り上げるようにした。例えば、パソコンとLAN（イーサネット）を発明した米国ゼロックス社は大きな宝を逃したといわれ、QRコードを発明したデンソーは直接的な利益は非常に限られている。しかしながら社会・産業への大きな貢献という栄誉を得たという面はある。また、文系学生に向けた情報系の資格取得（ITパスポート試験など）に役立つよう、対応項目では関わりを説くように進めた。

一方、ICTといった技術では解決できないことがあり、相手が重要な情報を伝えてあげよう、あるいは協力しようと思われる信用や人間性を学生時代から磨かなければならないといったことも話してきた。

・文理合同プロジェクト学習

産業界で活躍できる人材育成を目指したゼミナール活動として、理系大学の学生との文理合同プロジェクトを十数年間にわたり実施した。学生および大学にとって少しでも役立つであろうということで始めたものである。相手の理系大学（公立はこだて未来大学、システム情報学部）の先生はNTTドコモ時代の先輩研究者であり、文理合同のプロジェクト学習は学生にとって大変ではあるが得るところ非常に大きく、また各大学にとって意義は大きいと意見一致したのである。第1回は2007年（平成19年）に行った。当時は主に理系大学において必修科目としてプロジェクト学習が実施されていたが、他大学ましてや文系大学との合同のプロジェクト学習は見当たらなかった。

このプロジェクト学習（各大学3年生が実施）は携帯電話のアプリケーションを開発するものであり、専修大学がビジネスモデル提案、公立はこだて未来大学がプログラム開発という、各大学の特徴を活かした分担で実施してきた。座学で学んだことを活用する場として、経営学部の「理論と実践の融合」という基本理念に叶ったものである。

神奈川県川崎市と北海道函館市という遠隔地間のため、コミュニケーションと情報共有を如何に図るかが重要であった。ビデオ会議ツール（当時はSkypeを使用）の活用、情報共有のため公立はこだて未来大学のサーバの利用、そして合同合宿（伊勢原セミナーハウスにて2回）の実施によりプロジェクトを推進した。合同合宿は教務部、学生厚生部のご協力により、相手大学の学生・教員も利用できるようにしていただき大変助かった。

本プロジェクトでは、携帯電話サービス企業とIT企業の社員の方によるアドバイスを心得て実施してきた。このためお世話になった各企業に対して、プロジェクト終了後の2月に、学生が出向いて成果報告（デモを含む）を行うのであるが、これは学生にとって大変ではあるが貴重な経験となった。

第1回の合同プロジェクトの成果発表会は、生田校舎で実施したが、新聞取材を受けて読売新聞と神奈川新聞に掲載された（平成20年1月）。これはささやかではあるが本学経営学部のアピールになるものであり、担当教員として非常に嬉しいことであった。

この文理合同のプロジェクト学習はゼミ3年生にとっては密度の高い活動を要するもので大変であったが、理系という異なる領域の学生との共同作業は得るところが大であり、就活のみならず卒業後も役立っているようである。

・終わりに

専修大学経営学部で20年間、いわゆる文系学生に対してICT教育に携わることができたことは幸せなことであった。自主性が求められる自由な4年間を過ごす大学生に、如何に気付きを与えることができるかは、教員としての永遠の課題である。これは私自身にとって学びの機会でもあった。先生方および職員の方々に深く感謝する次第である。